



PHJ ピープルズ・ホープ・ジャパン ニュースレター NEWSLETTER

CONTENTS

国際保健のとびら

「コミュニティの力を国際保健の現場で活かすには」

今号の先生：PHJ 東京本部事務所
海外事業部長 中田好美

国内事業

東日本大震災支援

宮城県での支援の終了と福島県南相馬市の支援開始

支援企業訪問レポート

大日本住友製薬株式会社

知識を現地に根付かせる、そのために。

海外事業

「コミュニティの力」

カンボジア：医療施設と村人との橋渡しとなる人材

ミャンマー：教育の場だけでなく暮らしの中で知識を普及



Cambodia



Myanmar



Japan

コミュニティの力

医療環境が未整備で保健サービスが良くない
カンボジアやミャンマーの農村部。
PHJは地域住民が自ら健康を維持したり疾患を
予防するための教育活動に取り組んでいますが、
そのときPHJとともに動いてくれるコミュニティの力が不可欠です。
それぞれの国のコミュニティとのかかわりについて紹介します。



戸別訪問による保健教育

©Toshihiro Kubo

カンボジア

医療施設と村人の間の
橋渡しとなる人材

保健ボランティア・
母子保健ボランティア

カンボジアはいまや経済成長率が年7%の低所得国に位置付けられています。都市部、特にプノンペンの急成長は目覚ましく、外資による様々な施設の建築が進められています。

その一方で取り残されるのは地方の農村部に住む人々です。まだ発展途上で試行錯誤が続く保健行政の取り組みだけでは、地方の農村部に住む人々

べてに適切な保健サービスを届けることが難しい現状にあります。急激な経済成長の波は地方にも押し寄せており、多くの人が現金収入を求めて出稼ぎに出る中で、地域差がもたらす保健サービスの普及格差はますます広がるばかりです。

そこでPHJカンボジア事務所では保健省が地域で選出を義務付けている保健ボランティアや、PHJが独自に選出し育成した母子保健ボランティアといったコミュニティの人材と協力して保健知識や保健センター（*）のサービスの情報を村人に広めています。これにより、農村部における保健サービスの普及・向上をボトムアップで支えていく狙いがあります。ボランティアはPHJが支援する保健教育、会議や家庭訪問以外でも、日常の様々なコミュニケーションを通して保健センターと村人の間の橋渡しとなり、知識を広め情報共有を促進してくれる大切な役割を担っています。

最初は保健センターのサービスをよく知らない、あるいは悪い噂話を信じ込んでいた村人たちも、ボランティアからの正しい情報を得て、積極的に保健センターを利用し始めました。行政と地域の人材が手を取り合いコミュニティの健康を支えている様子は、日本に昔からある、助け合いの心を見てい

るようです。

《PHJカンボジア事務所長 福島菜見子》

* 村にある一次医療施設

VOICE

コミュニティの声

村での役割 保健ボランティア 兼
母子保健ボランティア
トライブンナレスさん 68歳

会議の場や直接保健センタースタッフにコンタクトを取ることで協力体制を築き、そこで得た情報を、PHJが支援してくれる保健教育や村の集会などを通じて村人と共有しています。病人が地域にいと連絡を受けた際は保健センターまで同行・照会をすることで受診を促すこともあります。

保健センターやPHJと協力し、同じ地域に住む人々に保健知識を広めてきた結果、以前は伝統的産婆に出産介助を頼むことが多かった村人が妊婦健診や分娩のために保健センターに行くようになり、予防接種や一般診療サービスも積極的に使うようになりました。

病気の予防についても知識が深まり、特に飲料水の衛生管理やトイレの使用を徹底するようになってきました。





ミャンマー

教育の場だけでなく 暮らしの中で知識を普及

母子保健ボランティア

ミャンマーの農村部の女性たちは妊娠や出産に関する適切な知識を得る機会が少なく、安全に子どもを産み育てるための知識が十分ではないという現状があります。

PHJでは2015年からネピドー特別自治区タツコン郡の妊婦さんや産後の女性を対象に5つのサブセンター（*2）を拠点とし、母子保健教育を毎月実施しています。教育は助産師が中心となり、PHJが育成した母子保健ボランティアと共にしています。

母子保健ボランティアの役割は母子保健の知識を普及させること、助産師が村にアウトリーチ（*3）活動に行ったときにサポートをすることです。現在まで合計24村、10代の男子から年配の女性までの50名のボランティアを育成しました。

母子保健ボランティアは毎月の母子保健教育の場だけではなく、自分たちが住んでいる地域でも知識の普及に努めています。村では、昔からの言い伝えで、妊娠中の食べ物のタブーがあり



保健教育の様子

本来であれば食べてもいいものを食べずに栄養が偏ったり、処方された貧血予防のための鉄剤を内服しないことがあります。しかし、母子保健ボランティアが適切な知識を伝えることによって、バランスよく食事を摂るようになったり、地域にいる身近なボランティアが説明することにより、鉄剤を摂取するようになったりと行動変容に結びついています。

助産師たちは「村の妊婦さんは助産師のアドバイスを聞かないことがある」と言うこともあります。そんな中で、

地域に根付いた母子保健ボランティアの存在は村の母子の健康を守るために重要な役割を果たしています。

《PHJミャンマー事務所 志田保子》

*2 村にある一次医療施設

*3 訪問保健サービス

VOICE



コミュニティの声

村での役割：母子保健ボランティア
オマージョーさん 20歳

子どもの頃に、村で出産中の女性が搬送中に亡くなってしまった出来事があり、同じような悲劇を繰り返したくないという想いから、母子保健ボランティアになりました。母子保健の知識がついたことで、村の妊婦さんから質問されたり、助産師に紹介したりと、村人に頼られるようになったことが良かったです。村に住む妊婦さんの中には病院などの施設で出産することを怖がっている女性もいます。サブセンターや病院で出産する方が助産師から十分なケアが受けられ、必要な薬も準備されているので安心だということを伝えていきます。村の妊婦さんたちに、自分が学んだ知識を伝えることが、ボランティアを続ける上でのモチベーションになっています。

コミュニティの力を国際保健の現場で活かすには



今号の先生：PHJ 東京本部事務所 海外事業部長 中田好美

慶應義塾大学政策・メディア研究科修士課程、チェンマイ大学社会科学部持続的開発コース修士課程を経て、タイの山岳民族を支援する NGO で働く。帰国後在東京タイ王国大使館で勤務し、2006 年より PHJ に入職。カンボジア事務所長として 5 年務める。ロンドン大学衛生熱帯医学大学院の公衆衛生修士課程を修了後、PHJ 本部に戻り、現職。



国際保健分野ではどのようにして住民を巻き込み、保健・衛生状況の改善につとめるのでしょうか。PHJ のカンボジアでの活動の経験をもとに海外事業部長の中田が説明いたします。

PHJ
Q1

国際保健におけるコミュニティの役割とは？

中田
A1

国自体に保健分野に割く予算や人材が足りない場合、村人自身が地域の中で助けあひながら自分たちの健康を守ることが重要になります。駐在していたカンボジアは、1970 年代の内戦でコミュニティが分断させられた歴史があり、隣国タイと比べるとコミュニティの力が弱いと感じました。また政府機関への不信感が根強くあります。

そこで公的医療施設のスタッフよりも、村人からの信頼があつた保健ボランティアに働きかけることで、保健教育をすすめました。カンボジアでの保健教育活動は、保健ボランティアを中心としたコミュニティの再構築と互助組織の活性化だったといえます。



保健センターでの保健ボランティアの会議

PHJ
Q2

コミュニティとのかかわりにおいて大切なこと。

中田
A2

保健ボランティアや伝統的産婆など、村のなかでも信頼されているキーパーソンと正しい保健知識の普及を行うことで、村人の意識や行動が目に見えて変わりました。保健ボランティアは村の住人で、相談役のような立場であることも知識の普及を促進させた要因の一つです。また、保健ボランティアに主体的に動いてもらうため、彼らのアイデアを活かした案件形成を行い、村人のニーズに寄り添うように配慮しました。

自分の健康を守るために、病気に関する知識をもち、何かあったときに安全な選択をしたり、正しい行動ができること。そのために普段から知識を伝え、助け合う関係性を村の中につくることを目指しました。保健教育は形にとらわれず現地に適した方法で続けてもらいたいと願っています。

※カンボジアには保健活動を担う保健ボランティアが各村に 2 名配置されています。



ボランティアの運営により現地に定着した搬送システム

PHJ

知識を押し付けるのではなく、健康を守るときの選択肢を広げる役割でいたい、とのこと。現地の人々の意志や想いを尊重する姿勢を感じると同時に PHJ の活動の意義を再認識できました。

PROJECTS IN JAPAN



左から 菅原保健福祉部長、森田医師会長、赤川副市長、PHJ 小田理事長、横尾、北島

気仙沼・石巻

東日本大震災

宮城県気仙沼、石巻、 多賀城への災害医療支援終了

2011年3月11日の東日本大震災発生から7年が経とうとしています。気仙沼、石巻、多賀城へのPHJの災害医療支援の終了に合わせて、昨年12月に気仙沼を訪問しました。気仙沼市役所では、赤川副市長や森田医師会長からPHJへ感謝の意を表していました。



道路工事や災害公営住宅建設中の気仙沼市街地

支援開始当初は、初めての国内災害支援で戸惑いはありましたが、PHJ理事の全日本病院協会前会長の西澤先生にご相談し、2011年6月に全日本病院協会の災害時医療支援活動班への費用支援を始めました。その後はご紹介いただいた気仙沼市医師会と連携して地域の診療所やクリニックの復興支援にむけて活動を開始。気仙沼市では医療機器寄贈を第1次(2011年12月)から第6次(2017年5月)まで、各病院へ被災状況に応じて行い、その後は地域包括ケアセンターへの医療機器寄贈を行いました。

石巻市は一年半前に新病院が駅前

にオープンし、寄贈したドクターカーはここで活躍しています。機器を寄贈した多賀城 腎・泌尿器クリニックも230あるベッドが満床になるほど再建が完了しました。

被災病院と支援者・支援企業の間で調整役となる私は被災地に38回足を運び、現地の声に耳を傾け、出来る限り要望に沿うように努力しました。

現在被災地では東日本大震災によって人の数が大きく減少し、患者さんへ診療所やクリニックよりも大病院へ集中する傾向にあるとのこと。大震災による影響の大きさは計り知れないことを感じます。最後に赤川副市長から「支援をきっかけにできたつながりを大切にしたい」というありがたい言葉をいただきましたが、PHJとしても初の国内支援でできたご縁を大切にしていきたいと感じています。

福島 南相馬市

子どもたちへの支援開始

南相馬市では原発事故により、地域コミュニティや家庭環境が大きな影響を受ける状況が現在まで続いています。外遊び、農作業など地域で当たり前だったことができなくなったり、制

限され、日常生活の大きな変化により、子どもから高齢者まで心や体の健康がむしばまれています。特に震災時、幼児・児童であった子どもたちは現在、中学生、高校生になり、進学、家庭、友達関係等で深刻な問題を抱えるケースが多く、メンタル面の支援が課題となっています。PHJは気仙沼や石巻での活動実績を基に、現地の支援団体と協働して南相馬市の子どもたちへの支援を開始します。

2011/3/15 ~ 2017/12/31

東日本大震災寄付金の収支 (万円)

収入	現金寄付	15,543
	物品寄付 (医療・事務機)	20,997
支出	医師派遣費・医療機器調達費	11,249
	物品寄付	20,997
	輸送費・スタッフ活動費	3,315
残額	今後の支援活動費	979



大日本住友製薬(株)は、"Innovation today, healthier tomorrows" をグローバルスローガンに掲げています。PHJは、生まれてから2歳までの子ども達が質の良いケアとコミュニティのサポートで健康な成長・発達を遂げるための枠組みをつくるカンボジア「子供の成長支援事業」を2016年のスタート時から大日本住友製薬(株)様よりご支援いただいています。活動のどこに意義を感じていただいたのかを伺いました。



支援企業訪問

知識を現地に根付かせる、 そのために

大日本住友製薬株式会社



コーポレートガバナンス部 コーポレート・コミュニケーショングループ主席
(グローバルヘルス担当) 丸山潤美 様

疾患の予防も健康も「知識」があつてこそ

数年前に、マラリア予防のために蚊帳を普及させる活動を支援していましたが、「モノ」の配布とともに、蚊によってマラリアが媒介されることや、蚊の発生を防ぐ方法といった「知識」が加わってこそ、マラリアを予防できるのだと実感しました。万一マラリアになったときにも適切な処置をどこでどう受けたらよいのか。何につけても知識が大事だと思っていました。

「知識という、大切にすり」を根づかせる活動に共感

安全な分娩や正常な発育といった「あるべき姿」がなかなかイメージされにくい国・地域において、栄養が成長に大切であるという概念を伝える・根付かせることが、健康の概念の下地になると思っています。そういったことを地域に実感させて根付かせるPHJの活動に大きな意義を感じました。

私は、真の意味で健康を保つには日々の食事がとても重要だと思っています。栄養のある食事でスタミナをつけることは、病気の予防にもなり、万一病気に罹った際にも薬の効果が十分に発揮されます。我々は病気に立ち向かう医薬品をご提供していますが、PHJは、「知識という、大切にすり」を現地に届けていらっしゃると思います。

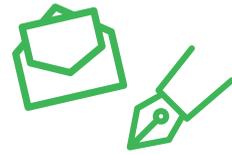
短期的な実績ではなく、長期的なつながりの強さを

【低所得国や低中所得国における非感染性疾患の予防、診断及び治療へのアクセス向上を目的とした、複数の企業や団体が参加するグローバルなイニシアティブ「Access Accelerated」に、大日本住友製薬(株)様が参画するにあたり、登録プログラムとしてPHJの「カンボジアの子供の成長支援事業」を選んでいただきました。】

Access Acceleratedは、参画企業のあいだで、活動のアウトカムの大きさではなく、医療アクセスへの想いを最重視しています。「取り組みの規模や、いかに貢献したかという数を比べるものではない」というコンセプトに、当社がPHJに感じているものと通ずるところがありました。地域との関係性をこつこつと大切に育みながら、短期的な実績ではなく、長期的なつながりの強さを重視なさるPHJの取り組み姿勢に、当社にご支援の意義を実感しています。

— 何よりもまず「知識」が大切と力説された丸山様。言葉一つ一つにPHJの活動への深い理解と熱い想いを感じました。インタビューにお答えいただきありがとうございました。



PHJ
の
輪

カンボジアの留学生に
国内イベントで
サポートいただきました

昨年11月にPHJが出展したむさしの国際交流フェスティバルの多言語紙芝居というコーナーで、PHJのボランティアスタッフとしてカンボジアからの留学生チャリヤーさんにお手伝いいただきました。当日の様子をチャリヤーさんご本人に報告していただきました。

多言語紙芝居で子どもたちにクメール語で話すことができ、何よりも嬉しかったです。少し恥ずかしかったですが、短い時間ですけれど、このフェスティバルを通して私はPHJのスタッフの皆様と交流し、PHJが発展途上国カンボジア及びミャンマーなどで活動していることに感動



多言語紙芝居の様子



中央がチャリヤーさん

しました。また、日本の皆様からの寄付でこの活動を応援してくださっていることに、言葉では表現できないほど感謝しています。一人のカンボジア人として私は将来PHJのような機関で弱い立場に置かれている方々に何か力になれたらいいと考えております。PHJの活動に参加でき、2017年の最後には非常にいい経験ができました。
(チョンホー・チャリヤー)

Hello!
こんにちは!

PHJ STAFF

PHJミャンマー事務所

20〜30代の若い力で、チームワークを大切にしながら仕事をしています。政府職員や村の人々と協力しながら、ミャンマーのお母さんと子どもたちが健康に過ごせるように尽力します。



(左からビョー・ゾウ・アウン、ティリチット、キン・ユーモン、真貝、ビョー・ミン・テュ、志田)

新しいスタッフから一言

キンユーモン
(フィールド・オフィサー)

農村地域で支援活動ができ、とても喜ばしいです。日本の駐在員から英語のスキルはもちろん、プロジェクトに関する考え方や意思決定を学ぶことができます。他のスタッフと一緒にプロジェクトを成功に導きたいと思っています。

ティリチット (経理担当)

日本人の駐在員と働きながら、国際NGOの経理業務を習得し、英語や保健医療分野と医療機器の知識も得られ、母子保健改善事業を助産師や村人たちと進められる機会を得て感謝しています。

PHJカンボジア事務所

若いスタッフと経験豊富なスタッフが、それぞれの個性や経験を活かした役割分担とチームワークで着実なステップアップを目指し、行政やコミュニティと共に事業を進めています。



(左から福島、岡本専門家、2人おいて、サレス、スレイリーン、1人おいて、シノル、ナリ、パリカ)

新しいスタッフから一言

スレイリーン
(プロジェクトアシスタント)

農村の住民は、PHJと協力することが自分たちの健康の改善につながることをまだ理解していません。様々な人と話したり知識を伝えることが得意なので、PHJと地域住民との橋渡し役となれるのがうれしいです。

PHJのお知らせ掲示板

ミャンマー助産師教育募金終了の報告

2017年7月より開始しましたミャンマー助産師教育募金は2017年12月29日に終了いたしました。集まった募金額は64万9059円となりました。短い期間に多大なるご支援に心より御礼申し上げます。

なお、本事業において実際に使用しました経費は73万7544円となります。不足分については自己資金にて調達する予定です。

【経費の使途】

講師謝礼金(6名分)、教材費(マスク、手袋、文房具、文書コピー代等)、助産師と婦人保健訪問員への交通費、ドブラー45個(母子保健クリニック、地域保健センター、サブセンター)、骨盤模型、軽食代、事務所交通費

【活動報告】

助産師トレーニングは5日間で、タツコン郡の全助産師43名と助産師を管理監督する婦人保健訪問員4名を対象に1グループ8名~11名に分かれて行われました(実施期間は2017年5月から3か月間)。今回のトレーニングでの知識テストとスキルチェックの結果は下記の通りです。

新人をのぞいた助産師に関してはトレーニング後に知識・スキルとも80点以上になりました。この結果を主催者であるタツコン郡保健局と共有し、特に新人助産師への教育は継続的に行う必要があることを認識しました。今後は郡保健局が主導となってタツコン郡全体の助産師教育を進める予定です。PHJは2017年10月より開始したプロジェクト活動地で助産師の技術強化に努めてまいります。

	知識テスト (前→後)	スキルチェック			
		妊婦健診	産後検診	分娩介助	新生児蘇生法
新人助産師 (就職後1年未満)	48% → 60%	72%	69%	45%	95%
助産師	56% → 84%	81.5%	81.2%	80%	98.5%
全体平均	55% → 79%	80%	79%	73%	98%

PHJ チャリティカレンダーの報告

PHJの2018アジアの動物カレンダーによる募金は、3,028,297円(2017年10月~2018年1月未まで)集まりました。皆様のご協力に感謝いたします。

三鷹国際交流フェスティバル2017では自分の干支の動物を子供達に描いてもらいました。▶



編集後記

PHJは健康を守るための関係性や仕組みを残すために「コミュニティ」に寄り添って活動をしています。そこにいる人たち同士で支え合いながら病気を予防し健康に生きる、という姿は、医療環境が充実している一方で住民同士のつながりが薄れていく日本にも必要とされている気がします。